三国湊
緑のリレープロジェクト

旅人よ、一歩踏み込んでください。
そこには、私たちの心のふるさとが、風味となって漂っている。

まちづくりと、森づくり。

GREEN RELAY PROJECT

足あと続くよこれからも

● 平成19年　夏
調査研究を行いました。
○「ナホトカ号重油流出事故」で提起された、自然環境、災害等の問題の調査研究
○三国湊の自然と人間との繋がり、自然との共生についての歴史的・文化的考察による調査研究

● 11月24日
シンポジウムを開催しました。
○「三国湊自然との共生～ナホトカ号重油流出事故から10年」
○会場から「三国の里山保全を始めませんか?」と提案の声!

● 12月～1月
活動方法を模索しました。

● 平成20年　2月～
「三国湊 緑のリレープロジェクト～minato meets satoyama!～」がキックオフしました。

● 2月
第1回「森の健康診断」
第2回「森づくりのプランをたてよう!」実施。

● 3月
第3回「森をつくる人になろう!」実施。

○借りた市有地をワッキの森、ナミィの森と名づけ、プロジェクト名を通称「みどりレー」としてHPを開設。
○「森の健康診断」を小学生にもわかりやすい環境教育プログラム「森のことば」としてヴァージョンアップ。

● 6月・7月・10月・12月・平成21年1月・2月
みどりレー実践活動
○下刈・チェーンソー講習＋枯れ松伐倒体験・植樹にいたる実践的な森づくり活動を実施。

● 平成20年　11月20日-22日
第1回　里山保全・森づくり人材養成講座開催
○県内外のボランティアと2泊3日の「実践」×「ワークショップ」の講座を開催。

● 平成21年　3月20-22日
第2回　三国湊 森づくり人材養成講座―海のきこえる森づくり― 開催
○11月の講座参加者が再集結!新たな参加者も加わり、地域間交流による森づくりは新たな一歩を踏み出しました。

● 3月22日
第1回　ふくいミクマリ会議開催
○九頭竜川流域の活動団体と環境×観光×歴史文化×教育をテーマに持続可能な流域社会を探るネットワークを形成。

三国湊
緑のリレープロジェクト

〈 NPO法人三国湊魅力づくりPJとは 〉

NPO法人三国湊魅力づくりPJは、地域住民や来訪者に対して、三国湊を中心とした三国地区の魅力ある賑わいの創出と、環境の保全に関する事業などを行い、地域経済の活性化に寄与すること、循環型地域社会への創出に取り組むことを目的として、平成18年度に設立いたしました。当NPOの母体「三国湊魅力づくり実行委員会」は「ふくい地域ブランド創造活動推進事業」に認定され、平成16年から3年間にわたり、まちづくり事業を行ってきました。現在はその活動を継続し、楽しみながら、持続的・発展的に行っています。

独立行政法人環境再生保全機構　地球環境基金助成事業

MIKUNI minato

その足をとめて、この森で会おう。

脳裏に焼きついて、はなれない景色がある。
胸を灯し続ける、あたたかな思い出がある。
忘れられない、笑顔がある。

決して派手ではないけれど
日本の各地に心やすらぐ美しい風景がある。
三国湊はそんな町。

この町の夕日は格別だ。
夜の帳が静かに下りて、森が海に溶け出す頃
ほてった体を優しい風が撫でていく。

日中のハードワークが嘘のよう。
心地よい疲労感に体が笑う。
横でうなずく友人がいる。

ボランティアで始めた森づくり。
賑やかに楽しんだり、がむしゃらに走り回ったり。
季節を愛でるよりも、汗を流す方が多かったけれど
愛しい景観が台無しになっていくのを見て
じっとしてはいられなかった。

できることから始めよう。動き出した２００７年。
ナホトカ号重油流出事故から10年を迎えた時だった。
バケツリレーに連なった地域の人とボランティア
よみがえった日本海に今日も夕日が沈んでいる。

三国に初めて来たという友人も
初めて見るのに、なぜだか感じる懐かしさ。
まるでそれは、心のふるさと。

町の小路が森へと続き、海に注ぎこむ景色を
この町の未来に届けたい。
その思いは今、物語となって紡ぎ出されている。

帯の幅ほどある町

古くは継体天皇の母・振媛が生まれた地として、室町時代には「三津七湊」の一つとして、江戸時代から明治にかけては、北前船の寄港地として。日本海へとそそぐ九頭竜川沿いに細長く横たわるこの町は、昔から日本有数の湊町として栄えてきた。

井原西鶴に「北国にまれな色里」と言わしめたほど格式の高い花街があり、芝居小屋や宿屋が賑わいをみせていた、歴史ある湊町。活気に満ちていた商人・職人文化の面影は、いまも私たちを楽しませてくれる。

「かぐら建て」の古い町屋や、軒下に敷かれた笏谷石。レトロな雰囲気が漂う旧森田銀行本店や旧岸名邸などの歴史的建造物。

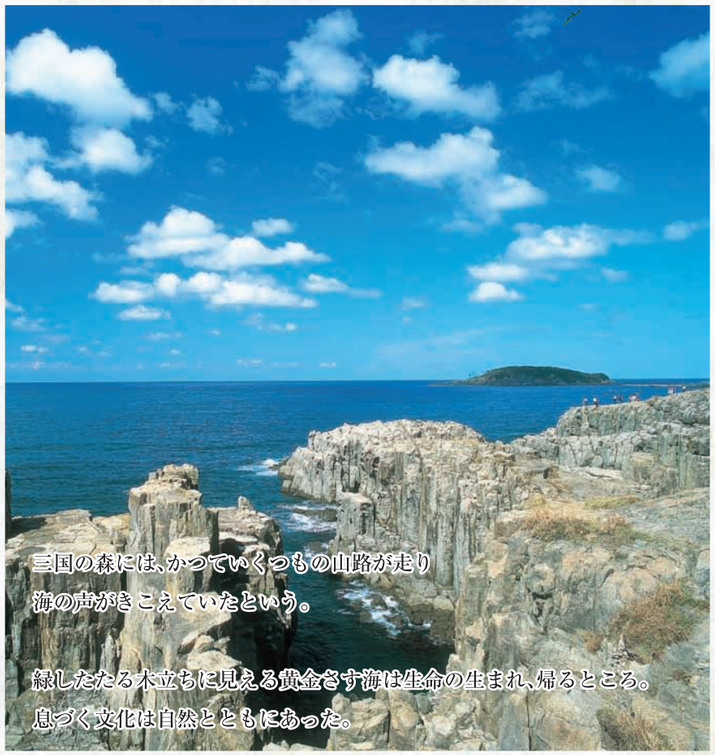
北陸三大祭の一つとして今に残る三国祭。小径へと一歩足を踏み入れれば、色濃く息づく歴史文化を肌で感じることができるだろう。そんな湊町の風情は、多くの文芸人を惹き付けた。昭和を代表する詩人・三好達治も、その一人。彼が三国で過ごした5年間、たくさんの文人や作家が訪れ、そこから世界へと数々の名作が生まれている。また、近松門左衛門が作った歌舞伎の最高傑作「けいせい仏の原」の舞台も、ジャンクアートの巨匠・小野忠弘が作品を発表した場所も、三国湊だった。作家・高見順や、三国の遊女であり、越前を代表する女流俳人・哥川（かせん）らを育んだ三国湊は、いつの時代も「文学の町として」華やいできたのである。

生まれも育ちも三国湊だし、ボランティアガイドをやって6年になるけど、**言葉にできないのはこの町の風情**。汲みつくせない魅力があるんだ。

昭和を代表する詩人の**三好達治**が、この町で5年間過ごしたうちに、たくさんの作家が訪れて名作を残したんだよね。三国は作家の**高見順**、遊女で女流俳人の**哥川**を生んだ文学のふるさとなんだ。

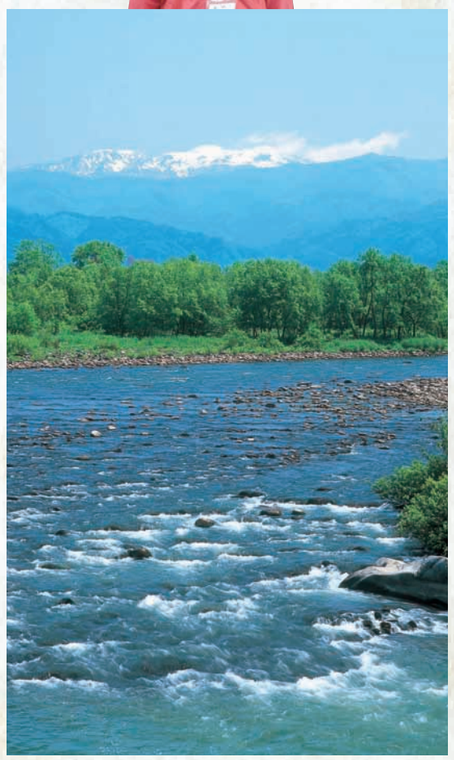
本当に食文化が豊かな福井。
お年寄りの方も大きな口をあけて三国バーガー食べてくださるの。色んな人がやってきて、楽しい話を届けてくれるし、いい町だと思うなあ。

MIKUNI BURGER



三国の森には、かつていくつもの山路が走り
海の声がきこえていたという。

緑したたる木立ちに見える黄金さす海は生命の生まれ、帰るところ。
息づく文化は自然とともにあった。



三国沖に浮かぶ雄島には、今も原生林が残っている。
かつて海民たちに神の島と崇められていたこの島は
今も昔も航海の灯を照らし、海を生きる人々とってなくてはならない存在だ。

やっぱり海だよね。
漁をしなくても、見てれば入りたくなるし、何より楽しいもん。

海のこえする山の路

大量の重油をすくったのは
高性能ポンプでなく、
人の手だった。

始まりはナホトカ号。

全国から30万人ものボランティアが三国に集結したナホトカ号重油流出事故。大量の重油をすくったのは高性能ポンプでなく、人の手だった。ひしゃくですくい、バケツリレーで運ぶ、誰でも参加できるボランティアだった。

それまで持っていた地位や社会関係が組みなおされ、大会社の社長も、フリーターの青年も、小学生も、みんな一人のボランティアだった重油回収現場。

「そんなことは無理だ」という思いこみから解き放たれ、「何とかできるんじゃないか」、「もしかしたらやり遂げられるんじゃないか」というエネルギーに溢れていたボランティア本部。

それまで社会に位置づけられていた「私」が崩れたとき、そこに残った丸裸の自分に何ができるのだろう。

それを探しだし、自ら行動を起こしていくのが、ボランティア。

どんな時でも、誰にでも、その人だからこそできることが、必ずある。

それは、どれほど小さな力と思えようとも、何もないところから掴みだしたからこそ代え難い輝きを放ち、社会を動かす確かな力となることを、ナホトカボランティアは明らかにしたのだ。

「よみがえれ日本海！」の思いは、文字通り美しく光る海をよみがえらせた。

阪神・淡路大震災、ナホトカ号重油流出事故を経て育まれた日本のボランティア活動は、NPO法成立に結びついた。

ここ三国には、ボランティアの土壌がある。事故から10年を経た2007年、よみがえった海に感謝を込めて、「三国湊緑のリレープロジェクト」がスタートした。重油を回収したバケツリレーに学び、山・里・河・海がつながる三国の緑を次世代にリレーしていきたいという願いを込めて。

そしてみどりリレーへ。

三国に多いマツ林。油気が多く、火力もあるマツは古墳時代から**製塩用につくられ管理されていたという。**

里山と人との
出会いの場をつくること

森を見れば時代がわかる。

マツは薪としても利用されたが、製塩が石炭や石油によって行われるようになり、薪がプロパンに代わると、マツ林は放置されるようになった。森を見れば時代がわかるの言葉通り、荒れた里山は鏡のように現代のライフスタイルを映し出している。

土地が肥えると、マツは弱ってくる。そこへ北米産のマツを経由して、長崎に約140年前から、福井には1953年前後からマツノザイセンチュウが入った。体長1ミリに満たないこのセンチュウは、マツの樹脂管を詰まらせ、枯死させる。天敵不在のまま膨大なマツ枯れが日本海を北上し、ここ三国のマツは壊滅的な被害を受けた。

2007年

里山と人との出会いの場をつくること。誰でも実施でき、持続可能な里山手入れの手法を確立することを目指した取り組みをスタートした。

「森の健康診断」では、里山の現状把握のため、植生と木の込み具合の調査を実施。

「森づくりプランを立てよう」では、調査結果をもとに、どんな活動がしたいか、どんな森をつくりたいか、そのために必要なことは何かをワークショップ形式で話し合った。

「森をつくる人になろう」では、プランにもとづき、枯れマツ伐倒跡地に三国で採取した種から苗木に育てたトベラ・シロダモ・ヤマザクラを植樹し、下刈りを行った。

「ずっと木を植えたいと思ってた」。「大きくなるのが楽しみだね」。「これからも、こんな風に続けていきたいね」。そんな活動をして、もっともっと地域が好きになっていく。3回続けた活動は、つまるところこの点に収斂されるのかもしれない。

2008年

借りた市有地をワッキの森、ナミィの森と名づけ、プロジェクト名を通称**「みどりリレー」**としてHPを開設。

「森の健康診断」を小学生にもわかりやすい環境教育プログラム**「森のことば」**としてヴァージョンアップし、専門家の指導の下、三国にあった森づくりを協議して、下刈・チェーンソー講習＋枯れ松伐倒体験・植樹にいたる実践的な森づくり活動を実施した。6月・7月・10月・12月・1月・2月と実施した活動を経て、森の景観に少しづつ変化があらわれてきた。

人と自然がつながる町で。

ゼロから始めたワークキャンプ

強制されるわけでもなく、自然とみんなが主役になって、このプロジェクトにとりくんでいた。そう、今後続いていく活動になった。これ、ほんとすごい。この土地や仲間が好きにならないとできないこと。

その日は澄み切った青空がどこまでも広がっていた。秋も深まりゆく11月。

県内外から6名の参加者を募り、森づくりのプロフェッショナルを講師に招いて、2泊3日で開催された第1回里山保全・森づくり人材養成講座。里山保全・森づくりの基礎知識・技術の習得とその実践と、地域に貢献するボランティア活動のあり方をめぐるワークショップ。「実践」×「ワークショップ」の両輪で持続可能な活動のしくみをつくることが、この講座の目指すもの。

刻々と開始時間が近づくにつれ、東京都・愛知県・愛媛県・福井市・三国町から粒揃いの社会人が集った。さまざまな職業、それぞれの思い。共通していることといえば、誰ひとり森林に関する知識も、林業の経験も、持ち合わせていなかったこと。

緊張の混じる中、オリエンテーションが始まった。重油回収ボランティアの際に、全国から押し寄せた大勢のボランティアで混乱する現場を、地元JCとしてコーディネートした長谷川さんの、汲めども尽きぬ経験が、まっすぐ参加者に伝えられていく。何もないところから井戸を堀り、電気を通し、三国で開拓農業を始めた山崎さんの、みどリレーの思いを聞いた。自分がゼロになったとき、果たして何ができるだろうか。胸が熱くなった。

車はフィールドに向う。それまで全く知らなかったマツ枯れ。予想をはるかに越えて荒れていた。どこからか森にゴミを不法投棄していく人が増えたという。

森のかたちは光を求める植物で決められてるんだ。下刈や間伐など一つ一つの作業が説明されながら、実技講習が始まる。初めて触れるチェーンソー。エンジンのかけ方を教わり、木の倒れる方向を見極める。その眼差しは真剣そのもの。枯れマツが倒れる手ごたえ。森に関わっている実感。想像以上に楽しい作業だ。自分たちの手が加わって、マツ枯れの森が姿を変えていく。夕日が指したフィールドに、あたたかな感触が残る。将来の森を見に来たいと思った。

作業を終えると、ワークショップがスタート。3日間を通じて、3月に実施する同じ講座のプログラムを「ゼロから立案する」という課題が設定された。「多くの人が参加したいと思うプログラムとは?」「どのような仕組み・仕掛けが必要だろうか?」。限られた時間の中で、アイディアを出し合い、検討を繰り返して、議論が深まっていく。現在進行形でプロジェクトが生まれている。ワクワクした時間が流れてる。今朝初めて顔を合わせたばかりなのに、ひとつの熱気に包まれている。みんなの歯車が、ぐっと動き出した。

夕食はみんなで自炊。今夜のメニューは鍋に決めた。買出しに10分も走れば、そこは九頭竜川の河口、日本海への入口。町屋が軒を連ね、ゆったりとした時間が流れている。湊町ならではの風情を感じながらの街中散策、食べ歩きもできる。早くも明日の昼休憩が楽しみだ。空腹にしみる食材は、全部地元でとれたもの。地元の方も加わって、アツアツの鍋に会話が弾み、顔がほころぶ。夜が深まるにつれ、3日間の短さを感じていた。

地域を愛する人がいる。その地を訪れる人がいる。人と自然がつながる町で、ゼロから学び、つくりあげた3日間は、これからも続いて行く。

このプロジェクトのよさは、汗を流して、参加者のみんなと体験を共有することだけじゃなくて、**地域に実際にある問題の解決**にとりくんでいること。

第1回目となる
里山保全・森づくり人材養成講座
テーマは「実践」×「ワークショップ」

「心のふるさとをつくる」ことは可能でしょうか。

昭和を代表する詩人に三好達治という人がいます。大阪の生まれですが、昭和19年より5年間、居を構えた三国に「わが心のふるさと」という言葉を残しました。

「かかる境にけふも来つ／海のこえする山の路」。彼が歩き見たであろう風景は今、マツ枯れによって跡形もなく消え去ろうとしています。

数十年前まで、野良仕事がつくりだしてきた里山は、燃料の宝庫であり、たくさんの生きものの住みかであるとともに、大気・水質浄化など多くの機能をもつものですが、手入れされなくなれば、その機能は失われてしまいます。

そして、森へ入る人が高齢化し、若者は都市へ流れ、ライフスタイルの変化などにより、地域の自然環境は荒れたまま放置され、景観は痛ましいほどに壊されてしまいました。大変な労力を必要とするのに、お金にならない森の保全。その一方、森の荒廃は海の荒廃をも連鎖させていきます。

誰がこれを止めるのか。気づいた人がやり始めるしかありません。重油で汚れた海にバケツをもって飛び込んだのも、地元の漁師や海女さんでした。三国へ各地からボランティアが集い、バケツリレーが開始され、海は奇跡的によみがえったのです。

どんな時代もそれに続く時代を夢見ています。

この町は、私たちにとってかけがえのない大切な場所であるとともに、訪れる旅人の愛すべき場所であってほしい。私たちは、地域内外のボランティアとともに状況の打開に取り組みたいと考えて、三国湊 緑のリレープロジェクトを始めました。それは、森づくりを通じて、心のふるさとをつくること、それを子どもたちにつないでいくことを目指しています。その一歩は、踏み出されたばかり。小さな波紋がやがて大きな輪をつくっていくように、私たちは、いつでもこのリレーに連なってくれる方を待っています。

GREEN RELAY PROJECT **SUPPORTERS CLUB**

三国湊
緑のリレープロジェクト
サポーターズクラブ 参加者募集

三国湊緑のリレープロジェクトサポーターズクラブは、
三国の里山保全・森づくり活動への支援を目的に設立されました。
例えば、枯れマツ1㎡を伐倒して搬出するのにかかる費用は約30,000円。
三国の枯れマツの規模は約80haです。
活動を持続可能なものとするために、プロジェクトをサポートください！

頂いた寄付は、里山保全・森づくり活動の直接経費にあて、それ以外の用途に用いることはありません。

あなたとできること。

ボランティアにご参加ください！

下刈から植樹まで、楽しみながら森づくり。
スタッフとして、ワクワクしながら
みどりリレーをサポート。

一人一リレ！応援ください！

一口1,000円のサポーターになって、
活動をご支援ください。

◎お申し込み方法

いずれのサポーターを希望される方も、住所・氏名・tel・fax・メールアドレス・所属をご記入の上、下記まで fax またはメールでお申し込みください。
http://mikuni-minato.jp/midorelay/volunteer　（ボランティア参加希望の方は、こちらの URL からお申し込みも可能です！）

◎お申し込み＆お問い合わせ先

NPO 法人三国湊魅力づくり PJ
〒913-0046　福井県坂井市三国町北本町 4-5-5
TEL. 0776-81-3921（三國湊座内）
FAX. 0776-81-3225
http://mikuni-minato.jp/midorelay
mail.midorelay@mikuni-minato.jp

合わせて、下記の口座に所定の金額をお振り込みくださいます様、よろしくお願いいたします。

ゆうちょ銀行口座	福井銀行口座
・ゆうちょ銀行	・福井銀行／三国本町出張所
・通常貯金：13370－8037131	・普通預金：1092879
・口座名義 「特定非営利活動法人三国湊魅力づくり PJ サポーターズクラブ」	・口座名義 「特定非営利活動法人三国湊魅力づくり PJ サポーターズクラブ」